マネージメント情報　２０１４年　５月

今回は、2008年４月のM情報に書いた、「牛群雲の如し」を再びここに紹介します。
辛苦の根室開拓と先人の偉業を是非もう一度思い起こして、この春の新たな出発の糧にしたいと思います。

いまこそ　「牛群雲の如し」

（株）トータルハードマネージメントサービス　代表　黒崎　尚敏

私は、以前から根室において、「牛群雲の如し」という言葉が時々使われているのをそれとはなく気にしていました。その意味は、なんとなく分るものの、その由来に関して知る機会が実はありませんでした。何人かの酪農家に聞いてみても定かな答えは返ってきませんし、若い酪農家にいたっては、その言葉自体知らないということでした。今回、酪農スピードNewsでお馴染みの　高宮　英敏による「酪農語録　北海道酪農を築いた人々」の中でそのエピソードが、端的に伝えられていました。このエピソードの大部分は、雪印乳業株式会社から昭和５０年１１月１日に発行された「牛群雲の如し　－根室酪農の歩み」を参考にしているものと思われます。私としては、この話を広く後世に語り継ぐと同時に、今こそその思いを再び燃え上がらせるべき時だと感じ、この二つの本を勝手に抜粋編纂し、ここに紹介することとしました。

牛群如雲

北海道根室酪農は、平成１８年現在、生乳生産量76万3715トン、乳牛頭数18万2700頭という、まさに日本一の酪農専業地帯となった。その酪農の基礎を築くきっかけは、昭和初期の冷害凶作であった。

Ⅰ.根室を襲った昭和の大凶作と飢餓

北海道は昭和6～10年の間に、6,7,9,10年と４度の冷害凶作に見舞われていた。昭和６年は春からの天候不順と日照不足によって、農地の９割が被害にあった。翌７年は、さらにそれを上回る大凶作となった。６月２９日、初夏というのに根室を大晩霜が襲ったのだ。気温は、上春別1.5℃、標津と西別は氷点下0.5℃、武佐は氷点下1℃になった。これで、大小豆、菜豆、稲キビ、たまねぎ、かぼちゃが全滅した。開墾してもわずかな土地は摩周系の火山灰地であり、ここで暖地型の穀しゅく（穀物と大豆の意）作物を営んだから、冷害にはひとたまりもなかったのだ。この時の霜は、霜というよりは雪と同じだったと古老

は伝えている。昭和４年３月２６日に長野県佐久の郷里を立ち、同４月３日上春別に入地した井出祐之助はその時のことを克明に日記にしるしていた。

「昭和７年６月２９日　大霜凍、夜明ケ前、寒暖計見ルニ零下２度、小豆全滅、イクサ同、黍４分、芋全部ヤケル、中長金時半分、ビルマ７分ヤケタリ。

同６月３０日　大被害跡ヲ見ルニ、実ニ惨タル畑ノ有様ニテ、作物ハ黒ク地立ニ立チ、黍白クタレ、モノスゴキ状態ナリ、吾等農民春秋度大敵ノ中ニ此１生命ヲ続ケ行クトハ、萬物霊長モアワレナリ。」

その年の秋、わずかに残った作物を保護すべく、９月中旬以降、官民一致して結霜の来襲を警戒し、燻煙法を行ったが、９月２４日未明無情にも根室管内全耕地に大結霜が再び襲い、万事休す、惨状を呈するにいたった。

この時の根室の窮状は想像を絶した。馬糧の燕麦を食料とし、わらび、ふき、ぜんまい、おおばこなど、口に入る野草は何でも食べた。「目下名も無き草根木皮に命を継ぐ者あり」と記されたのである。北海道庁は「燕麦食料化農具」なるものに５割補助を出した。燕麦を人間が食べられるようにするため、発動機・籾剥機・精穀機・圧扁機を一つにした機械であった。北海道庁が移民に当たって宣伝した映画（活動写真）には立派な水田、りんご畑、遡上するサケが写されていた。根室農民は、騙されたと怒り、「生活を救え、保証しろ」と、むしろ旗を立て暴徒化するものも出た。

Ⅱ．「官」とは・・・　凶作長官　佐上真一

このとき、この窮状を現地視察したのが、当時の北海道庁長官、佐上真一であった。佐上は東京帝国大学法科を卒業し、京都知事などを歴任後昭和６年10月に第21代北海道庁長官に就任した。在任中、凶作や不漁、水害、函館大火が相次いだため「凶作長官」とあだ名されたりした。130ｋｇを超える巨漢であった。この佐上が殺気立つ根室にやってきた。警察関係者は、「佐上に万が一のことがあっては・・・・」と、壇上と農民の間に垣根を作った。しかし、佐上はそれを見るなり即刻、「こんなものは不用だ」と怒鳴って取り外させ、「諸君は陛下の赤子だ。断じて陛下の赤子は飢えさせない。騙されたと思って10年、頑張ってくれ。笑って手を握り合える日が来るぞ。佐上を信じてくれ」と訴えた。

佐上の話が終わると、農民は誰一人声なく皆，嗚咽を漏らしたという。　ぼろぼろの着物、足の下が透けて見える地下足袋、やせた顔、夕日を背に空箱の上に立つ長官はそれ以上黙して語らず・・・・。後に佐上はこのときのことを、自分がただ伝えたかったことは、「官（自分）は、常に原野民とともにあること」、「君たちだけ苦しませはしない」ということだけだったと回想した。そして「今も私の記憶に残る光景は、計根別の麦畑である。見る限りの麦畑ではあったが、穂は１本も見えず、根元にはジメジメと苔が生え、その畦にはヘソをさらけ出した子供たちが、もしや１穂の青枯でもと探している姿である。ヒソヒソと話し合う人たちの群れを取り巻くものは、湿っぽい陰惨な暗い影で、果ては“１万人のボロの行列”にまで拡大したと・・。

Ⅲ. 「一路勇往邁進せよ」の大号令

・・立ち上がる根室酪農と酪農の夜明け

佐上は直ちに、凶作罹災者に対する食料給与、移民救済土木工事、税金の減免、医療救護の手を打った。そして、この冷害に強い根釧原野の実現のため、当時北海道製酪販売組合連合会（酪連　雪印の前身）の宇都宮仙太郎、黒澤酉蔵、佐藤善七らの建言を取り入れ、「根釧原野開発５ヶ年計画」を策定した。これが我国初の乳牛飼育（酪農経営）を主体とする地域開発計画であった。計画の内容は、１．根釧原野にとどまる意思のないものに離農補助金を与える　２．平均 5-10ha の所有地を 15-20ha に拡大　３．８割補助の乳牛導入　４．牛乳の受け入れは酪連が行うこと　５．乳牛飼養管理の指導者の配置　６．医師の常駐　７．　殖民鉄道や集会所の設置　などであり、根釧原野農業の大転換を図った。計画は、昭和８年から 12 年まで５年間とされ、この間根室管内に導入された乳牛は８割補助のメス牛 2000 頭を含め、3000 頭以上に達し、酪連も集乳所と製酪工場を 25 箇所も建設した。昭和８年、当時の根室支庁長、笠島達三は「原野指導標の明示する所に従い、一路勇往邁進せよ」と酪農民を鼓舞激励した。原野指導標とは、開拓道路の４つ辻に立つ角材でその四面にそれぞれ「期内農業開発５ヶ年計画必成」「熱だ、誠だ、真剣だ」「自力更生」「乳と蜜の流るる理想郷」と記されていた。これらの乳牛と施設によって、今日の根室酪農の基が築かれた。酪農の定着によって、根釧原野の酪農民による冷害救農土木工事の要請はなくなった。酪農が冷害を克服したのだ。

Ⅳ.　官人佐上元北海道長官の見た根室の驚異と感謝

佐上は北海道庁長官を辞した後、日本防空協会常務を務めた。昭和 18 年８月、北海道の防空視察のため来道したおり、「成長した根室酪農をぜひ見たい」と言って、７年ぶりに根室入りした。佐上の乗る自動車が牧草畑を走り抜けると、草刈中の年老いた農民がねじり鉢巻の手ぬぐいを高く高く頭上で振り回した。同乗の植松標津町長（当時）が、「閣下を歓迎しているのです」と説明した。佐上に対する農民の感謝は一通りではなく、こうした感激的な出来事が至るところで起こった。そのときのことを、佐上は「あの手を振った老農がなんと言う人か私の記憶にないが、あの人は、今日、佐上がここを通ることを待っていてくれたのだ。農家の傍らを通るときには、家内中の人たちが家の前に揃って歓迎してくれた。こうした真実のこもった送迎を受けたことはなかった。「“驚異的”という言葉は、この根室原野 10 年の今昔をいうものだ」。

上春別で私が部落の人たちに、心からのお礼を申し上げて会場を出ようとするときに、篤農家井出祐之助君が、「佐上さん・・」と呼びながら追いすがってきた。「何か用か？」と聞くと「いやなんでもありません。ただ、お顔が見たくて・・・・・」と涙を流してうつむいた。私も「しっかり頼みます」と手を握ったら「閣下、あのときは本当に無理ばかり申しまして・・・・」と言ったあとは、目に手を当てるばかりだったと回想している。

Ⅴ.根室原野放棄論と牛群雲の如し

北海道興農公社（現　雪印乳業）中標津工場に立ち寄った佐上は、「群がる乳牛の姿を見ると、うれし涙が出る」と言って、硯と筆を持って来させ、「**牛群如雲**」と揮毫した。「**牛群雲の如し**」と読む。この時この工場前には、多くの農民が、一升瓶につめた牛乳、かぼちゃ、トーキビを持ってならんだという。佐上は「育ての子らはすくすくと成長して、立派に国家へのご奉公をしているのだ。根室原野放棄論を見事に見返してくれたのだ。」と、涙した。この時佐上は、「笑って手を握り合える日が来た」と思ったに違いない。

昭和40年、別海村の乳牛が2万頭を突破した時、村内の酪農民は関係者の後援を得て、佐上の銅像を建立した。歴代北海道庁長官で道民の拠出金で銅像を建てられたのは、佐上一人だけだ。

別海町役場ロビーにその銅像は置かれ今も、根室酪農の発展を見守っている。

銅像裏の碑文は、黒澤酉蔵が書いた。「長官は本村発展の大恩人なり。連年の冷害凶作にあえぐ本村の実情を深く憂慮、根釧原野開発の根幹を酪農経営に求むるべしとなし、酪農転換に進んで援助の手を差しのべらる。本村酪農発展の基なり。その恩沢を受け深く徳を仰ぐ。長官の遺徳をしのび、功績を後世に伝えるため記念の像を建つ」と記され、佐上の業績をたたえている。(写真)

佐上は、この喜び涙を流したわずか3ヶ月後に、列車内で脳溢血に倒れ、不帰の客となった。

Ⅵ.受け継がれるべき根室酪農民「渾身の開拓魂」

酪農根室が今再び、困難のときを迎えている。しかし、この先人たちの辛苦を思えば何ほどのことがあろうか。根室原野放棄論さえ飛び交ったこの時代を、官民一体となって乗り切った「渾身の開拓魂」は、必ず今日の酪農家に受け継がれているはずである。

「根室原野ノ開拓未ダソノ途上ナリ、一路勇往邁進セヨ、根室酪農ニ復路ナシ！！」

官とは、官人とは、民とは、国民とは、なにか
なぜ私たちが今この根室の大地に生きていられるのか
先人の苦労に報いるとはどういうことか
忘れてはいけない、受け継ぐべき根室の過去がある

黒　崎

讃佐上長官
比年冷害衆窮糧
明府憂言迸熱腸
農民発憤動悲畜
別海更容化乳郷
佐上長官之像